



○長崎と永井隆博士

長崎女子高の龍踊部の演舞⇒

新型コロナウイルス感染症が全国的に拡大する前の最後の旅行先が長崎でした。この年、勤務していた教育センターの全国大会が長崎であったので、約 25 年前に友人の結婚式で訪れて以来久しぶりに2度も訪れました。



全国大会のレセプションでは、長崎女子高の龍踊部の舞が披露されました。長崎くんちの龍踊りに、女子が舞うことへの異論もある中、熱心な取り組みからやがて地域から認められた伝統芸能を伝える部活動で、今は一番部員数が多いそうです。



ちなみに友人の結婚式は、友人がカトリック信者であったので、平和公園からほど近い浦上天主堂(右写真)でありました。司祭が執り行い、聖歌隊も登場するなど、めったに経験できない式でした。



観光で修学旅行生等が行くのは、グラバー園の入り口近くにある

国宝の大浦天主堂(左写真)です。幕末の開港にともない建設されました。隠れキリシタン達が信仰の告白をプティジャン神父にしたことで、彼らが江戸時代に信仰を続けていたこと

がわかった有名な教会です。開国後もキリスト教は禁止され、明治初期まで信仰は犯罪行為でした。ちなみに、遠藤周作の著書で映画化もされた『沈黙』は、島原の乱後の長崎での激しいキリシタン弾圧を描いています。

知ってのとおり、キリスト教はフランシスコ・ザビエルによって 1549 年に日本に伝わりました。山口市と鹿児島市にザビエル(記念)聖堂があります。残念ながら、山口市の聖堂は 30 年前に焼失して、その後再建されました。

浦上天主堂は、爆心地に近いことから、原爆で倒壊し、戦後再建されたものです。塔の部分が吹き飛び、そばを流れる小川に残ったままになっています。そこから再建後の浦上天主堂を見上げると、いかに爆風がすさまじいものだったかわかります。恒久平和と隣人愛の精神を発信し続けた永井隆博士の手記「長崎の鐘」は、古関裕而により歌になりましたが、そのモチーフになった鐘がそこから掘り起こされた浦上天主堂の鐘です。原爆の直撃を受けましたが、再建後の塔に戻され、今も荘厳な音を響かせています。

昔友人が浦上天主堂にほど近い公園で話したことが今でも忘れません。「ここが公園になっているのは、原爆で亡くなった方を茶毘に付したからで、住宅地にはできない。」というものです。永井隆博士の病室兼書斎である「如己堂」は、この近くだったと思います。三刀屋の永井隆記念館には複製された如己堂があります。

浦上天主堂の凄惨な歴史は、原爆だけではありません。明治初期の浦上四番崩れもその一つです。浦上四番崩れとは、江戸末期から明治時代初期にかけて起きた大規模な隠れキリシタンの摘発事件です。明治政府は、浦上信徒らを、津和野藩や萩藩に配流にし、各藩では信仰を捨てさせるために激しい拷問が行われました。浦上天主堂の境内の一角には、毛利氏の山口県萩藩に配流された信徒らが正座させられ、棄教を迫られた「拷問石」が置かれています。亀井氏の津和野藩には、153 名のキリシタンが送り込まれて迫害され、激しい拷問の末 36 名の信徒が殉教、つまり亡くなりました。身動き取れないほど小さな「三尺牢(ろう)」に閉じ込めたり、氷の張った池に投げ込んだりする激しい拷問が行われましたが、このことを描いた小説が、永井隆博士の絶筆となった『乙女坂』です。カトリック津和野教会には、永井隆博士の原稿が展示されています。また、拷問を受けた場所には乙女坂マリア聖堂が建てられており、壁画には迫害の場面が描かれています。

研修旅行などを通じて永井隆博士の足跡に触れ、平和について考えることができたいと思っています。